

環境学習:2025年12月度 E16「環境学習参考文献紹介2」

ロバート・ビロット著 旦(だん)祐介訳『毒の水』日本語版 2023年4月 花伝社

会員 K.T.

■プロフィール Robert Bilott(ロバート・ビロット/環境弁護士・1965~)

1965年8月2日生、1990年オハイオ州立大学大学院モリツ・カレッジオブロー修了

米国ウェストバージニア州の農村に廃棄された化学廃棄物によって被災した原告を代表してデュポン社を相手に訴訟、化学物質 PFOA(パーフルオロオクタン酸)と PFOS(パーフルオロオクタンスルホン酸)の廃棄物による危険な曝露訴訟を20年に渡って続けた。2017年2月、デュポンは\$6億7070万を支払うこと「和解」。2019年10

月、彼の回想録『Exposure:Poisoned Water,Corporate Greed, and One Lawyer's Twenty-Year Battle Against Dupon(暴露:毒の水、企業の貪欲さ、そして、ある弁護士のデュポン社に対する20年に渡る闘い)』が出版された。(余談)この回顧録を元に2019年、デュポン社との法廷闘争を描いた長編映画『Dark Waters』は、これらの化学物質の危険な曝露について、世間の注目を集めた。2024年バイデン大統領は、米国での飲料水中のPFASを規制するための政策を発表、同年4月、米国では「4.0ppt」という基準値が最終決定された。

■「毒の水」[著]ロバート・ビロット著 旦(だん)祐介訳、日本語版 2023年 花伝社

「第1幕 その農場主 第1章 ドライ・ラン川 1996年7月7日 誰も彼を助けようとしなかった。その農場主は、太陽でまだらになつた渓谷を流れる小川の淵にたつて。(中略)昔は透き通っていた。しかし、今や食洗機の排水のようになってしまった。石の上を流れるにつれて、泡が石鹼の膜のようにできていた。(中略)彼の家畜が死んでいるだけではない。シカ・鳥・魚・その他の野生動物がドライ・ランとその周辺で次々と死んでいた。(中略)」「第2章 電話」「第3章 パーカーズバーク」「第4章 農場」「第5章 秘密の原材料」「第6章 紙の手がかり」「第7章 科学者」「第8章 手紙」「第9章 会議」「第10章 雌牛が帰ってくる」「第11 和解」「第2幕 町 第12章 岐路」「第13章 最初の血」「第14章 特権化」「第15 代替データ」「第16 破壊欲」「第17 ネズミとヒトについて」「第18 テフロンの歩兵たち」「第19 現実的悪意」「第20章 アベ・マリア(神の助け)」「第21 言説戦争」「第22 疫学」「第23章 知られざる健康被害」「第24 企業の知識」「第25章 急転直下」「第26章 ビッグ・アイディア」「第3幕 第27章 調査」「第28章 第二波」「第29 腹黒い科学」「第30章 証明責任」「第31章 痙攣」「第32章 報いへの道」「第33章 公判」「第34章 報い」「エピローグ」と続く。「第34章(前略)訴訟と公判は進展が見られなかった。公判はいつも同じ結果、— デュポンの責任が認定され、損害賠償と懲罰的補償は毎回高くなつたが、控訴された。(中略)サーチャス判事は裁判を早めることにした。もしデュポンがすべて控訴するつもりなら、我々はもっと裁判の数を増やす必要がある。まもなく広域系属訴訟の日程に、2017年末までに40のガソリン訴訟を終了するとの要請が付記された。(中略)2017年2月、デュポンは、オハイオ州とウェストバージニア州の3500以上の裁判について、6億7070万ドル(約765億円)を支払うこと、「和解」した。(中略)和解の後、毎日のように新しい裁判の問い合わせや講演の依頼があった。(中略)PFOA や PFOS より生体持続性が低いと宣伝される Genx のような代替品を含めて、4千種類近くある PFAS 全体(現在は 12,700 種類とされている)が危険かもしれないという意識が高まった。化学式が似ていて、動物実験の結果もあるので、全部が有毒か発がん性が疑われる。(後略)」、回想録は、新たな集団訴訟に挑むところで筆を置いている。

■お薦め

本書は、ロバート・ビロット弁護士本人によるノンフィクション著書。英文タイトル『Exposure:Poisoned Water,Corporate Greed, and One Lawyer's Twenty-Year Battle Against Dupon』はビロット弁護士が、環境問題の責任を問うべく、巨大企業と20年にわたって戦い続けた自伝的記録である。世界的な大企業のデュポンが、有害な化学物質を工場外に垂れ流していた。米国の地域に広がる健康被害、1人の農場主の訴えから巨悪に気づいた弁護士が、市民のため、訴訟に挑む。18年の戦いの末に、6億7千万ドルもの和解金を勝ち取り、政府も規制に乗り出した。問題の化学物質は、日本でも注目が高まりつつある有機フッ素化合物の総称「PFAS(ピーファス)」だ。著者はその事実を膨大な調査によって暴き出す。法的な責任を問うための壁は高く、多くの困難が立ちちはだかる。巨大企業との争いの中で、企業側の論理と被害に苦しむ人々、不安にかられる人々、ビロット自身の苦悩を描く。「和解」は「科学的な証明」ではなく、「関連性の可能性」というC8委員会の調査基準に同意したものだった。もし、この「裁判」がなかったらPFASの危険性を人々は、まだ知らないままだったかもしれない。その後、PFAS関連の訴訟は、他にも広がり、ミネソタ州・ミシガン州・カリフォルニア州・アラバマ州でも起きている。日本は2000年代からPFAS環境汚染の記事はあるが、「有効な証拠」が難しいため、まだ訴訟は起きていない。PFASの環境汚染は21世紀の新しい環境問題である。

